

# TOPPOS TOKIWA POST

VOL. 23 AUTUMN

## 常磐大学

- 大学院
- 人間科学部 ■国際学部
- コミュニティ振興学部

## 常磐短期大学

常磐大学高等学校  
常磐短期大学 附属幼稚園

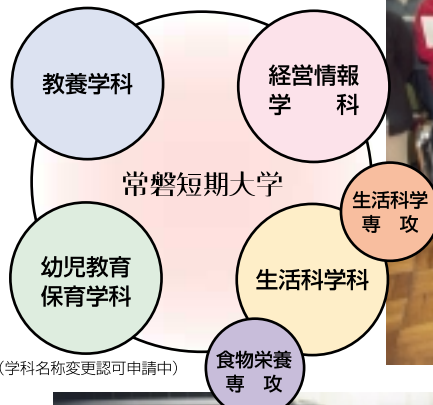
[2001.9.25.]

発行/学校法人 常磐学園 ■編集/学園報編集室 水戸市見和1丁目430-1 電話 029(232)0007 <http://www.tokiwa.ac.jp/>

# 個性を可能性に変える教育環境づくり。

## ■進化する常磐短期大学

現在、常磐短期大学では新しいカリキュラムづくりをはじめさまざまな改革に取り組んでいる。時代の流れを捉え、社会の要請と学生たちの学ぶ意欲に応える…それが、進化する常磐短期大学だ。



- ↑社会的ニーズの高まる保育にも力を入れ、定員増も予定されている「幼児教育学科」。
- ←実習重視の実践的な教育を、さらに高める「食物栄養専攻」。四大卒業後の入学者も数多く学んでいる。



は、資格取得や実習・演習重視のカリキュラムをさらに多く導入することで、広く社会に必要なとされる人材の育成に取り組み考えた。「目的を絞って学べるよう教養学科



に対する学生の意識や社会からの要請は少なからず変化しています。今回の改革はその変化に対応するためのファーストステップ。学生たちが一人ひとりが持つ固有の可能性を伸ばし、社会との密接なつながりを築くことが目的です」  
中原学部長

学びたいと言う意欲に応えるためさまざまな改革を試みます。

「**い**ま常磐短期大学では、平成十四年度を目標に、学科名の変更、入学定員の増減などの改組に取り組んでいる。具体的には、現在の「幼児教育学科」を「幼児教育保育学科」(学科名称変更認可申請中)とし、定員を一〇〇名から一二〇名(定員変更認可申請中)に増員。それにもないカリキュラムを見直すなど、より時代に適応した短期大学づくりを進める方針だ。「時代の流れにともない、短期大学



常磐短期大学学部長  
中原 経子

全体の方向性を見直すことをはじめ、経営情報学科は情報分野のスキル向上に力を入れ、知識だけではなく実践的な内容で技術面のスキル向上も図ります。また、幼児教育学科は保育教育を充実させる『保育社会学』や『保育臨床』などの科目の追加を予定しています。生活科学専攻では、資格の取得も視野に入れた『生活と福祉』という分野を専門科目に設け、カウンセリングや介護についても学べるようにしました。さらに『生活とつながり』という分野を『生活とデザイン』に改め、服飾やインテリアなどデザイン関連のカリキュラムを充実させます」

「**本**学は同じキャンパス内に四大、大学院、附属幼稚園があることも大きなメリットとなっている。

「施設の共用はもちろん、同じキャンパス内で学部の先生方や四大生たちと接することは、勉強面の刺激につながります。こうした環境が、人間的にも広がりを与えてくれるんです」

また高い就職率も本学の特徴だ。これは、就職した卒業生の活躍が認められ本学出身者が高い評価を得ているため。もちろん、二年間学んだ後でなおかつ学びたい学生に対しては、四年制大学への編入という方法もある。

「学生と教職員との距離が近いことが、何よりもこの短大の良いところだと思っています。学生一人ひとりの個性を理解し、ともに学び成長していく、こうしたふれあいを大切に、これからも求められる短大づくりを行っていくつもりです」

◎シリーズ23 オミナエシ

## はかなげに揺れる秋の花の“ものがたり”

能に「女郎花」があります。男の亡霊が、花は、契りを結んだ男が遠のいたのをはかなげに放生川に身を投げた女の化身と語ります。男は小野頼風、花は女が着ていた山吹の衣装の色。男もまた女の後を追って身を投げたのです。話を聞いた僧が念仏を唱えて二人を弔いましたとき、というお話です。

女郎花と書いてオミナエシと読みます。女飯(おみなめし)の意味で、花を粟飯(あわめし)にたとえたとする説がありますが、語源はよく分かりません。

日当たりのよい山野に生える多年草で、万葉集にも詠まれ、秋の七草の一つとして親しまれています。茎は直立し六〇cm〜一m。葉は対生し羽状に深く切れ込み、花は茎の先に多数つき散房状となり、八〜十月に咲きます。花冠は黄色、五裂します。北海道から九州、さらに朝鮮、中国、シベリア東部に広く分布。においが腐った豆(豆作ったひしお)に似ているため、中国では敗醬の名があり、薬として消炎や排膿などに、根は乾かして利尿剤に使われています。



常磐の四季



レポート

# ◆国際学部教員による国際協力 エチオピアの 教育レベルアップのために



教科書はほんの二・三冊あるか無い  
かで、鉛筆やノートも十分になく、  
クラスに八十人も生徒がいて、そして  
全ての授業が英語で行われる授業を中  
学校から受けたら皆さんはどの  
ように勉強したらいいでしょうか。こ  
れは、アフリカ東部、エチオピアの首  
都アジス・アベバの大多数の子供たち  
が置かれている現状です。このよ  
うな状況はまだ恵まれているほうなの  
です。なぜなら、ここの子供たちには教室が  
あるからです。地方に行くと、学校は  
木の下、子供たちは棒きれで地面にノ  
ートを取るといふ場所もあるのです。

常磐大学国際学部の学内共同研究プ  
ロジェクトはフランク・バーバリツチ  
教授、小川明教授、依田泉助教授、松  
原克志講師、渡邊真由美講師の五名を  
メンバーとして、エチオピアでのこ  
のような状況を改善する手助けをした



中学校の図書館

と違い、中学校での学習教材を豊かに  
していくことでエチオピアの教育水準  
を高めることを目的としたプロジェク  
トです。このプロジェクトは今年で二  
年目を迎えています(小川教授、依田  
助教授、松原講師、渡邊講師は今年度  
からの参加)。このプロジェクトはEQ  
E (Education Quality Enrichment  
Project「教育の質を高めていくプロ  
ジェクト」と呼ばれています。

この八月、バーバリツチ教授と松原  
講師はアジス・アベバを訪問、二週間  
滞在してきました。今回でバーバリツ  
チ教授は三回目、松原講師は初めての  
訪問でした。バーバリツチ教授はアジ  
ス・アベバ大学で開催されたエチオピ  
ア化学会年会でEQEプロジェクトに  
関係した研究発表を行うよう招待され  
ました。その大会で、お三方ともEQ  
Eのエチオピア側メンバー、支援者、

国際機関で働いている方などに会い  
ました。訪問のもつひとつの目的は  
新しいNGOであるLEO (Learning  
Enrichment Organization「学習を  
豊かにする組織」)を支援していくため  
に、学校そのものを参観していただく  
でした。もちろん、友人を作り、エチ  
オピアの文化を学ぶことも忘れてはな  
らない目的でした。

バーバリツチ教授は、「私たちは多  
くの素晴らしい人々と出会うことがで  
き、そのおかげとても快適に過ごせ  
ました。食べ物や香料が効いていて  
辛く、エチオピアのコーヒーは地元  
の人たちが言うように、コーヒーの原産  
国だけあって、とてもおいしかった。  
そして、松原先生がまた最高でした。  
松原先生はその土地の全てを楽しんで  
いました。アムハリックを話し、その  
地方のダンスまで踊って交流に積極的  
に参加していました。それから、地方  
を訪問、エチオピア式の温泉  
を楽しみました」とお話し下  
さいました。



町外れの市場

エチオピアは貧困が進み、  
問題も山積みです。このよう  
な問題を改善していくことがす  
ることは手こたえのある、や  
りがいを感じさせる事柄です。  
皆さんはこういう活動に参加  
したいと思いませんか。「私たち  
はEQEが発展し、国際学部の  
一部分として定着させてい  
ければと考えています。将来  
このような支援活動について  
のコースを提供することもで  
きますし、現地に滞在し、こ  
のような活動に積極的に参加



学会の発表

したいと考えている学生の皆さんをサ  
ポートできるようにしていければと考  
えています。もちろん、もし興味があ  
れば、EQEのプロジェクト・メンバ  
ーに会ってみるのもよいでしょう。私  
たちも、エチオピアの子供たちもあな  
た方を待っています」とバーバリツチ  
教授はおっしゃっていました。

## Topics! 大学教員と学生による保育支援活動 「まつのこぐみ」保育支援

幼児教育学科は、二年生の課題  
研究として、附属幼稚園で未  
就園児のための親子プログラムを提  
供している。それが毎回十五組の親  
子を募り、江波諄子教授と学生十名  
が保育活動にあたる「まつのこぐみ  
保育活動」だ。昨年度より始まった  
まつのこぐみは、大学ならではのユ  
ニークさと質の高さに定評があり、  
毎年多くの申し込みが集まっている。  
このプログラムは幼稚園の保育活  
動を知ってもらうだけでなく、親離  
れ子離れも目的のひとつ。親は子供  
とできる限り交わらず、子供たちが  
ひとりでも遊べるよう自主性を育て  
ていく。

また、学生にとっては大学の卒業  
に当たる課題研究、工夫をして新し  
い遊び道具を作る教材研究も行い、  
しっかりと記録も取る。  
子供たちに教えるのではなく、親  
学生、教員が気付きながらともに学ん  
でいく、それが「まつのこぐみ保育活  
動」の大きなテーマだ。



自由に遊び回る子供たち

## Topics! 第八十三回全国高等学校野球選手権茨城大会 常磐大学高等学校野球部・三回戦へ進出!

夏の暑い日差しが照りつける日  
立市民球場。九回の裏、主将  
を務めるエース斎藤良亮が、大宮高  
校最後の打者を左飛に打ち取った瞬  
間、スタンドから  
まるで優勝したか  
のような歓声がわ  
き起こった。

七月九日に行わ  
れた夏の高校野球  
茨城県大会で、創  
部二年目、夏の大  
会初出場の常磐大  
学高等学校が、初  
勝利を手にした瞬  
間だ。



勝利の瞬間、マウンドに駆け寄るナイン

「思つくと暇がなかった。一イ  
ニングでも引いていたら、負けてた  
と思う。攻めに徹したのがよかった」  
二十三歳の青年監督、須田武志監督は  
試合を、こう振  
り返った。

部員数三十八  
人。三年生は一  
人もいない。グ  
ラウンドが完成  
したのも今年の  
五月。それまで  
は大学の見和グ  
ラウンドと茨城  
町にある茨城ス  
タジアムで練習



を繰り返す毎日だった。「勝  
てるようになってから出  
場したい」という前監  
督の野上博之部長の判断  
で昨年は出場すらできな  
かった。その悔しさをぶつけた  
大宮戦。五回まで一点リードし五回に  
一度逆転をゆるす展開だったが、六回  
斎藤は自らのバットで同点となる三塁  
打を放ち、一気に流れを変えた。六回  
以降は一人の走者も許さない完璧な内  
容で完投勝利。打つても三塁打とチー  
ムを引っ張った。「自分たちの力で、新  
しい伝統を作りたい」と、斎藤投  
手。母校の歴史の一ページ目を飾った  
充実感がどの顔からも読み取れた。  
二回戦は日立北と当たり十二対八で  
勝利。三回戦では強豪の土浦日大に敗  
れはしたが、レギュラーが三年になる  
次の大会、夢は大きく膨らんでいる。



Circle Flash!

テニスは全身のパネと持久力が必要とされる、想像以上にハードなスポーツ。だからこそ、勝利したときの喜びはこたえられない。そしてこの春、その勝利の味をかみしめたのが「硬式庭球部」だ。

硬式庭球部が所属する関東大学テニスリーグは、春と秋の二回、大会が開催されている。そして肝心なのは春の大会。この大会で一部リーグから七部リーグの入れ換え戦が行われるのだ。常磐大学は昨年まで六部リーグに所属。しかし今年春の大会は、五勝〇敗と六部リーグで優勝。五部リーグとの入れ換え戦で明治学院大学に六対三と圧勝し、創部初の



念願の五部へ昇格！  
来年の大会で  
さらに上のリーグへ

Circle  
サークル紹介  
Flash!

第7回  
硬式庭球部

五部リーグ昇格を決めた。この成績は県内トップレベル。私大ではナンパワンのチームといつことになる。これだけの実力派チームともなると、部員のほとんどはテニス経験者。高校時代、インターハイに出場した選手や全国選抜に選ばれた選手も少なくない。毎日の練習もそれなりに厳しい。夏休みには週五日、千波湖畔での走り込みや練習を日が落ちるまで行っている。

「練習は厳しいですが、先輩後輩の関係はそれほどでもないです。基本さえ守れば、うるさく上下関係可言うこともありません。いまは秋の大会に向けて後輩を引っ張りながら、自分たちも伸びることが目標です」

主将を務めるのは国際学部・国際協力学科三年の大内豊さん。部員数が年々減少するなか、ヤルキのある入部者を待望している。また、副主将を務める人間科学部・組織管理学科三年の大内章広さんは「秋の大会は春の大会に向けて自分たちの実力を試す調整期間。しっかりと戦い、春につなげたい」と語っていた。

念願の五部リーグ昇格を果たした硬式庭球部。チーム全員でさらに上のリーグを目指し、まずは秋の大会として春の本番を迎える。



→主将を務める大内豊さん(左)

sat. 28. July  
オープンキャンパス開催

常磐大学・常磐短期大学を楽しみながら理解するオープンキャンパスが開催されました。来年の春には、キャンパスの一員として再会しましょう！

- ① 折り紙を体験する高校生
- ② 入試概要説明を受ける高校生たち



ようこそ、知のワンダーランドへ。

別企画などがメイン。人間科学部は箱庭やコンピュータを利用した「心理学実験」、国際学部は「海外研修・国際協力実習」などの写真やビデオ上映。またコミュニケーション振興学部では、折り紙のメッセージや車椅子体験などが印象的な「コミュニケーションアドベンチャー」。そして短期大学は、就職内定者やAO入試合格者をはじめとする「学生による体験談」や「幼教発表のビデオ上映」など、それぞれ独自の工夫を凝らしたイベントを行い、大学・短大で学ぶ楽しさを伝えていた。また、教員・在学生による



個別の入試相談にも多くの高校生が集まり、フロアは真剣そのもの。

石岡市内から参加した女子高校生は、「短期大学の経営情報学科のコナーを見てきました。高校でもパソコンの授業はありますが、それはまったく違う高度なコンピュータ技術はすごいですね。CGやアニメーションなどにも興味が出てきて、自分もここで勉強してみたいな」と瞳を輝かせ、入試概要説明会場へ足早に向った。

■第三回・常陸那珂港見学ツアー  
地域の発展と公共事業を考える

「常陸那珂港」を知らない人は少ないと思う。しかし実際に行ってみないと分からないこともある。地域発展への期待と抱える問題…君は本当に常陸那珂港を知っているだろうか。



●クルーザーで東防波堤視察へ

今回は天候にも恵まれ無事実施された。今回参加した学生は村山先生の授業を受ける四十七名。短期大学・生活科学科一年の野澤千幸さんは「とにかく大きいことに驚きました。それから、東防波堤はひとつ二億円もするケーンを三百個も使って、最終的には総延長が六千メートルにも達するって聞いて本当にビックリです」と感想を語った。また、短期大学・生活科学科一年の大塚奈津子さんは「このような貿易港を見学するのは初めてなので、その大きさに圧倒されました。それから印象に残ったのが六十メートルもあるカントリークレーン。一時間で五十個のコンテナを積み降ろしできるなんて、まさに最新の設備なんです。でも、当初の建設予定費が六千八百億円だったのに、いまでは一兆円を超える計算になっているのを知り、公共事業の難しさや問題点を考えさせられました」と、常陸那珂港の建設を身近な問題として捉え始めていた。



●展望台で説明を受ける学生たち

東京湾に集中する首都圏物流の合理的再編や北関東地域の経済発展など、さまざまな役割を担い建設が進められる「常陸那珂港」。敷設工事が進められる北関東自動車道とのアクセスにも全国的な関心が高まる。国家規模でのプロジェクトだが、その現場を見る機会はほとんどない。

そこで地域の経済や物流、また、県、企業の共同事業の仕組みなどを理解するため、国際学部・村山元理先生が企画する、第三回常陸那珂港見学ツアーが七月三十一日開催された。

ツアーの視察ポイントは、国土交通省ケーンヤード管理センターでの常陸那珂港概要説明、クルーザーでの東防波堤視察、北ふ頭案内、展望台での周辺環境・工事進行状況説明、そして作業基地での工事内容解説の五部構成クルーザーでの東防波堤見学は気象状況によって中止になる場合もあるが、

平成十一年度末には、北ふ頭の内外貨物ターミナル施設が完成し、共用が開始された常陸那珂港。この見学ツアーは、学生たちにとって、地域の発展と公共事業の関係を学ぶ絶好の機会となった。



テレビや新聞で毎日のように報道される凶悪犯罪。いつからこの日本は、こんなに恐い国になったんだろう。君だって、犯罪者や犯罪被害者にならない保証はない。イヤな事だけ目をつらさずに、真剣に考えることが大切だ。それがこの世から犯罪を無くす、第一歩につながっている。

国際学部 辰野文理 専任講師に聞く

犯罪学とボランティア活動

# 犯罪学を学ぶことは 本当の自分と向き合おう

自分は犯罪を絶対に 犯さない自信があるか

凶悪化する少年犯罪、キレル子供たち。いや若者はかりではない。年齢に関係なく、毎日どこかでショッキングな犯罪が多発している。この傾向は現代特有のもののだろうか。

「量的には、必ずしも増えているとは言えないと思います。凶悪な犯罪も昔からありました。ただ、メディアの伝達力が現代は圧倒的に強い。それが

社会の関心が高まっている要因の一つではないでしょうか」

確かにここ数年、メディアは大きな発展を遂げ社会的な影響力も強まっている。しかし、犯罪件数が増えているからといって、楽観視はできないと辰野先生は考えている。

「例えば一時期、連続的に十七歳の犯罪が増えました。そこには『自分を確かめたい』『存在を知ってほしい』『何らかの評価を得たい』という当たり前の心理があるんだと思います。だから十七歳の犯罪をメディアが大きく取り上げるほど、その心理がゆがんだ形で表れ、犯罪に走ってしまう可能性も高くなる」

こうした犯罪が起こる原因は非常に複雑で、家庭や学校、そして社会にまで広い関連性を持っている。簡単に原因を無くすことは難しい。

「だからといって、何も出来ない訳ではありません。例えば、犯罪者が二度と罪を犯さないよう生活するにはどうしたら良いか、またBBS活動のように、非行少年が立ち直るには何か必要かを



●少年院を見学する学生たち

## Profile

たつの ぶんり  
筑波大学大学院経営政策科学研究科修士課程修了。●専門は犯罪学、被害者学、刑事政策。法務省入省後、法務総合研究所、同省保護局観察課勤務を経て平成八年四月より現職。



考え、それを実践することも出来ます」

BBS(ビッグ・ブラザーズ・アン・ド・シスターズ・ムーブメント)活動とは、保護観察になった少年たちの社会復帰を応援するボランティア。少年たちの相談相手となり、キャンプなど集団生活を通して、こころを開くきっかけづくりを手伝っている。

「授業で少年院や刑務所のビデオを見ること、そして非行少年であった彼らと実際に接することは、自分を見つめ直す機会にもなります。なぜ犯罪を犯してしまったのか、また自分は犯さない自信があるのか」

辰野先生は、少年院などの施設見学も授業に取り入れている。テキストを読み、そこから得た知識を踏まえて現実を見ることで学ぶことは多い。

「現実を知ると、犯罪者が育ってきた不運な環境や、犯罪被害者の受けたダメージを、自分の事として受け止める苦しむこともあり。もちろんこれはとても貴重な経験です。しかし学問として捉えた場合、感情を抑えた冷静な視点が必要で」

犯罪学は、心理学、社会学、精神医学、生物学などさまざまなバックグラウンドを持っている。犯罪という、たくさんの方々が複雑に絡み合うテーマを考えるには、関連領域の手法や論理が必要なのだ。辰野先生はその中でも、リサーチを重視するスタンスをとる。

冷静な視点で捉える 報道の裏にある真実

刑法や刑事司法といった社会制度上の仕組みや裁判の流れ、また人間の心理や教育の問題など、犯罪学から学ぶことは非常に多い。

「犯罪学は、人間の嫌な面や社会の暗い部分を見ざるをえません。しかし、例えば新聞を読むとき、伝えられている報道の裏側にある真実を自分なりに考える知性や、犯人や被害者がこれからどうなっていくのか想像できる心を養ってほしいと思います」

メディアと犯罪とは互いに密接な関係を持っている。犯罪の予防、犯罪者の社会復帰、そして被害者のケアを考えるには、興味本位ではなく、常に冷静で客観的な視点と情報リテラシーの向上が求められる。

「また、人に迷惑をかけなければいいという考え方を一歩進めて、社会の一員として役に立つ自信と、役に立ちたいという意識を持つてもらいたい。それが『自分を確かめたい』『存在を知ってもらいたい』『何らかの評価を得たい』という心理への回答にもなりますから」

国際学部では、国際協力の実情を知りたいと希望する学生のために、青年国際協力論とその演習で体験的に学ぶ機会を提供している。

今回演習先に選ばれたのは、東マレーシア・北ボルネオ島「財団法人オイスカ」の協力で、専任教授同行のもと、二十名の学生が農業と植林のボランティア活動に従事した。



共同で行う植林活動

日から三十一日までの十二日間、行き帰りの空路や内陸での移動に合計四日間かかったが、それでも八日間の実習等が行える充実したスケジュールだった。今回の演習はボランティア活動と同時に国際交流を図ることを目的としていたため、農業・植林活動を行ったのは四日間。残りの四日間は視察や現地の人たちとの交流に充てられた。その一環として、今回は二泊三日のホームステイを実施。日本との生

## 共同作業で、互いに通じあうところを育む。

青年国際協力演習／国際学部



参加した20名の学生たち



農作業、稲刈りを手伝う

活環境の違いに驚きながらも学生たちは地元の人たちの暖かさにも感動していた。同行した専任教授は「共同作業は互いを深く理解することに役立ちます。たとえ言葉は通じなくても、分かりあえる部分が必要で見える。それが国際交流の第一歩ではないでしょうか」と、学生たちの今後の活躍に期待を込めて語っていた。

それを痛感させられる事件がアメリカで起きた。膨大な死者を出した同時多発テロ事件だ。いかなる理由があってもテロ行為は決して許されない。もちろん二度と繰り返してはならない。イデオロギーや文化の違いがあっても、人は理解しあえることを本学の教授たちの活動が示している。いま私たちにできることは、少しずつ、確実にこうした認識を世界に広めていくことではないだろうか。

\* TOPOSに対する御意見は kouhou@tokiwa.ac.jp. までお寄せ下さい。  
\* 再生紙を使用しています。